

気づかう

伊勢原市立伊勢原中学校

三年

垣内

清将

私の祖父は視覚障がい者です。子供の頃病
で両目が見えなくなりました。視覚
障がいとは、視力や視野等の視機能に障がい
があり、見ることが不自由又は不可能になっ
ている状態のこととわかっています。

祖父は生まれつき目が見えなれ、たので、
外の景色や色とわかったものを見たことがあり
ません。かした。なので、祖父の小さい頃の夢
は、外を一度で良から、自分の目でしか
り見たいし、た。た。た。祖父は目が見え
ないからといって他人に迷惑をかけたくな
く、大抵のことは自分でやることにしてい
た。私はこれを聞いて、祖父は本当に優
しい人なんだと思えました。なぜなら、もし
私が祖父の立場だ、たら、何かを行動する
ために人に助けを求め、自分一人でやること
しないと思、たからである。

視覚障がい者では無い私があつた。一つの行動は、祖父は「それは決して簡単では有りません。またそれは歳をとるごとにどんどん難しくなります。私は小学生三年生の頃に初めて祖父と会うことになりました。その時に父からは体が不自由になつてきていると話されました。でも代々祖父は思っていた以上に元気で、外で一緒に遊んでくれたりしました。私はそれがすごく嬉しかったです。家に帰つてもたくさん遊んでもらいました。その日の

夜、トイレに行く途中に祖父の部屋を覗いて見ると、祖父は具合が悪く見えました。で、たしてしまいました。その時に私は祖父に無理をさせてしまいました。私に言つた時に、少し顔がこわばつたからです。私はすごく後悔をしました。私が遊ぶのは簡単でも、視覚障がいでは体が不自由になつてきている祖父にとつては、とても大変で難かしいことだつたからです。これを思つた時に私は、無理をし

それでも他人を優先できる祖父のよきな気が
える人になりたいと思いました。

私が小学生六年生になった頃、祖父と一緒に
暮らすことになりました。視覚障がいのある
祖父と一緒に暮らす中で工夫していたこと
があまりあります。一つ目は、手を繋いで道案内を
してあげるようにします。こりするこ
とによって安心して移動できるようになります。
二つ目は、時計が見えないのでボタンを押す
と音声で時間を知らせてくれるものに変えて
あげることです。こうすることでよって家
で一人になっても時間を知れるようになります。
あ。三つ目は、廊下などの通り道に手すりを
つけてあげることです。こりすることによ
って、自分が移動したい時に移動ができ安全に
歩くことができます。祖父の劣等級は一級
でしたが、このような色々な工夫をすること
によって、一般人の生活に近い生活ができる
ようになりました。

祖父は亡くなりました。最後の

最後まで他人を気付かす優しい祖父でい
われました。私は祖父のような他人を
気付かえる人になれよう。自分のこと
だけを考えず、相手の気持ち
を正しく理解し、いりなさと思いま
す。また、障がい
の種類は一つだけではありません。な
り、その人の障がいに寄り添い、理
解して助けあつて生活していくな
が、必要だと思ひます。そ
のためには、他人を気付かえる優
さが大切だと思ひます。このよ
うな人が増えることを願
っています。